

〈研究ノート〉

ララ物資と沖縄

—ヘイファー・プロジェクトによる山羊の事例—

LARA Relief Supplies for Okinawa - The Case of Goats by Heifer Project -

奥 須磨子

Sumako Oku

【Abstract】

This paper is to clear the sending process of LARA relief supplies for Okinawa above all goats sent by Heifer Project. As milk for babies and as meats for eating, goats played important role in the rehabilitation of Okinawa destroyed by world war II. This Heifer Project was an inter-faith project that received support from a variety of denominations and agencies: Brethren Service Commission, Evangelical and Reformed Church, American Baptist Home Mission Society, Mennonite Central Committee, Rural Life Association, Fellowship of Reconciliation, National Catholic Rural Life Conference, and Methodist Committee for Overseas Relief and so on.

【キーワード】

ララ物資, 沖縄, 山羊, Heifer Project, ヘイファー・プロジェクト, 沖縄復興布哇基督教後援会

はじめに

この研究ノートは、太平洋戦争敗戦からおおよそ2年後の1947年、あらゆるものの絶対的欠乏状況下で苦闘する沖縄に、ララ（Licensed Agencies for Relief in Asia, アジア救援公認団体）を通じてもたらされた救援物資としての山羊をめぐる覚え書きである。

筆者は以前、戦時下に破壊された日本で暮らす人々の生活がどのように再建されていったのかを考察する手掛かりとして、ララを取り上げたことがあった。その際、手に取った厚生省刊の『ララ記念誌』では¹⁾、沖縄は記述の対象となっていないことに気づいた。ララの救援を受けた当時、

被った打撃の大きさ深さ、さらに占領体制でも日本の他の諸地域とは異なる状況下におかれていた沖縄を思えば、そこに対する救援は別のプログラムでなされたであろうことは容易に想像のつくところである。しかし当時は、沖縄に対するララによる救援がどのようなものであったかを意識したのみで、それを課題として取り組むことなく今に至ってしまった。ようやく、少しばかりの関連資料が集まったので、そのうちから、山羊に関するものをいくつか抜き出してノートとして整理してみたい。

1. 沖縄に対するララの救援

最初に、ララによる沖縄（沖縄県と鹿児島県奄

美諸島地域) 救援のなかでの山羊の位置を知るために、救援全体についての基本的事柄を確認しておきたい。ただ、残念ながら、冒頭で触れた『ララ記念誌』に相当するような、沖縄に対する救援全体を把握できるものは、現在まで公刊されていない。そこで、いくつかの記述資料を寄せ集めながら概観してみよう。

まず、ララが行った救援の期間である。沖縄におけるララの活動開始は1947年6月のことで、救援物資は翌7月から来始める²⁾。以降継続したララによる物資供給は1953年までで終了し、以後はリバック物資がこれに代わった³⁾。なお、奄美諸島の返還は1953年12月のことであるから、ララによる救援期間中、同地域に対する救援は「沖縄」プログラムの対象として行われたことになる。ちなみに、日本(沖縄県と鹿児島県奄美諸島地域以外の諸地域)でのララの活動開始は、1946年6月、救援物資の初着荷は同年11月、最終着荷は1952年6月であった。

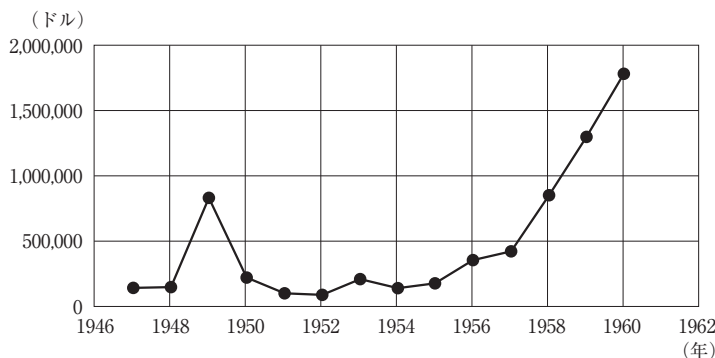
次に、救援物資の規模であるが、これについて現在までに入手し得た資料は、1947年から1960年までのララおよびリバック物資入荷総額の推移をドルで示した琉球政府作成のデータのみである⁴⁾。これを図1で示した。ララによる期間1947～53年の入荷額をみると、初入荷の1947年度は年度途中からの入荷のためか、14万3,000ドルであった。それも含めて終了までの7年間の1年度当たり単純平均入荷額は25万ドル強となる。しかし、この規模での救援で年々安定的に推移したわけではない。むしろ、きわめて大きな変動を

含みながら継続されたと見るべきであろう。まず、1949年度の増大ぶりが目を惹く。一挙に83万ドル余、前年度15万ドル余の5.5倍となり、救援活動の盛り上がりが見えるようである。ちなみに山羊2,615頭が到着するのも、この年度中のことである。この急増直後の大きな落ち込み、すなわち、1950年度は対前年度比4分の1に、翌51年度は対前年度比2分の1になり、52年度には10万ドルを割り込むまでに減少したことも目を惹く点である。ここで用いたデータに入荷額落ち込みについての説明はないが、1950年と言えば朝鮮戦争の勃発した年である。アジアで救援を要する地域と人々が一挙に増大したことが、沖縄への供給が減少した一因になったことは想像に難くない。

どんなものが救援物資として贈られたのだろうか。ララを通じて到着した救援物資全体のドル表示金額はすでに述べたとおりであるが、期間中の物資全体の内容を把握できるものとして筆者が現在までに入手し得たものは、次に示す極めて簡単な記述のみである。それは供給終了から7年後、琉球政府によるもので、「ララと称された当初の援助物資は衣類が主で、豚、山羊等が送られてきた。衣類が主であつたのは、終戦間もない当時は、日本との取引もなく一般住民の衣類は殆んど軍払下げ品であり、所持量も少なく又、豚、山羊も全滅に近い状態であつたので、繁殖を目的として贈られたものである。援助物資中、豚、山羊は町村単位に配給された」⁵⁾。

全体が記述されているにしてもあまりにも簡潔であるので、二つの資料でこれを補うこととする。

図1 ララ・リバック物資入荷額の推移(1947年～1960年)



一つは、当時の新聞『うるま新報』の記事である。まず、記事から拾える物資内容を見てみよう。ララ物資が初めて着荷したのは1947年7月22日で、その際の救援品は「衣料約三百梱 食糧三百四十梱」であった。次いで8月7日「衣料石鹸等七十梱」、9月1日「衣料百九十梱及び粉ミルク ビタミン剤等三百三十余梱続々到着した」。続く10月21日には乳山羊194頭。48年中の記事では、「ミシン7台」、「押麦600袋」、「鉛筆7箱」、さらに「サントニン百瓶、一瓶千錠」や「ペニシリン百五ダース」「ビタミン剤十五万錠」といった医薬品、そして9月28日に「ハワイ連合沖縄救済会の心づくしの種豚五百五十頭（内十四頭は航海中へい死）」が到着したことなどを報じている。また、49年には、種子類、綿布、山羊、米、乾李、砂糖なども挙げられている⁶⁾。もう一つの資料は、初着荷から7か月間についてのみであるが、当時の沖縄民政府がまとめたものである。すなわち、「ほとんどはんぶんは衣類で、だいぶん古着であるが洗濯、消毒、種類わけ、荷づくりなどはちゃんとあつた。衣類の一〇トンにたいして学用品は計およそ四〇トン、靴二〇トン、食糧二〇トン、それに、すくなくはあつたが寝具、石鹸、山羊、書籍と玩具、日本語の聖書、讃美歌集、ミシン、豚コレラ用の血清などであつた。この血清は一〇〇、〇〇〇ccで沖縄の苦悩する農業の危急におうずるため寄贈者が運賃も支払い、しかも軍の正規ルートを通じては入手ふかのうな時期に一回で空輸されたものであつた」という⁷⁾。救援物資総体の把握を踏まえたものではないが、衣料や食糧あるいは医薬品といった生存自体に不可欠のものだけでなく、さらに、種子類・家畜あるいは学用品というこれからの生活や生産の復興に重要なものが届けられたことが分かる。

物資の寄贈者・団体については、必ずしも全部が明らかではない。ただし、初期7か月間に届いた200トンについては、前掲の沖縄民政府刊行物が次のように記している。「約四分の三はキリスト教会世界奉仕団からのものである」。これと「ヘイフアズ救済会」からの山羊194頭とを除いた残り約4分の1は、「ホノルル、ロスアンゼ

ス、アルゼンチンにある沖縄人会からのものであつて、そのうち二回はアメリカ、フレンド教会奉仕協会の援助によつて沖縄におくられたもの」であつたという⁸⁾。また、これ以降の『うるま新報』記事中にも「ブラジル沖縄救援委員会」、「在カナダ沖縄救援連盟」、「南米ボリビアの同胞」、「在メキシコ沖縄戦災難民救済会」、「在東京沖縄人連盟総本部」などからの着荷および送出の知らせや活動報告などの記事が見える。これらのことから、沖縄救援については早い時期から、在外沖縄出身者が活動を始めただけでなく、ララ物資の一部は「郷土出身者」「在外同胞」などからの寄贈品との強い認識もあつたことが窺われる⁹⁾。

ここまでのまとめとして、日本と比べながら、沖縄の特徴を整理すると次のようになろう。①沖縄での活動開始は約1年、救援物資到着は約8か月、日本より遅れて始まった。ただし、戦争末期から敗戦直後の困窮状況の相違からして当然であろうが、とりわけ初期において、衣料を主に、人口比からすると相対的に大量の物資が送られた。②初期7か月間着荷重量の約4分の1は、ハワイ・南北アメリカ大陸在住の沖縄出身者や二世などが中心となって集めたものであつた。③沖縄へのララによる救援の早い時期に、山羊・豚が届けられている。家畜2種のうち豚は、ララの全期間を通じて沖縄以外の日本へ届いた記録はなく、沖縄限定であつたことは見逃せない特徴である。

以上のように整理したうえで、「はじめに」に述べた本稿の趣旨に関連して、まとめ③に少々補足をしておきたい。豚については比較的知られているといつてよい。528頭が1948年9月28日に沖縄に到着したこと、「沖縄の畜産復興に豚は食料、食用油、肥料問題解決に多大の貢献をなすもの」と信じて、ハワイ在住沖縄出身移民によって結成された布哇聯合沖縄救済会がララを通じて届けた贈り物であつたことなど、これまでに注目され、明らかにされてきたからである¹⁰⁾。

一方の山羊は、豚と異なって日本にも届けられており、沖縄限定ではなかった。しかし、沖縄限定でないにしても、次の2.で改めて述べるが、沖縄にはララの期間全体で2,809頭が届けられて

いるのである。数のみで言うなら、沖縄に届けられた豚528頭をはるかに上回り、日本に届いた2,036頭をも上回る。沖縄の戦後復興過程におけるララを通じた支援の役割を把握するうえで、山羊に関する考察は不可欠であろう。このような視点とは異なるにしても、古くより当地では食肉文化が育まれ、豚と並んでその中心を占めてきた山羊は、とくに畜産の戦後復興過程を考察する研究分野では、必ずと言ってよいほど、触れられてきた。その成果等に学びながら、以下にララを通じた山羊到来について検討する。

2. 寄贈山羊の到来

ララを通じて山羊が沖縄にもたらされたのは、1947年10月と1949年4月から1950年2月までの二つの時期であった。従来の研究によると、前の時期に194頭、後の時期すなわち1949年4月から翌年2月まで11回に分けて2,615頭、前後期合わせて2,809頭が到来した。これらはアメリカ産の乳山羊（雄も含む）で、ザーネン・トッゲンブルグ・アルパイン・ヌビアン¹¹⁾の4種で、農民は、この大型で多量の乳を出す山羊に驚き、ますます山羊乳に対する認識を深めたとされている¹¹⁾。

前期の寄贈は、本稿1.の救援物資内容を記した箇所¹²⁾に10月21日「乳山羊194頭」到着とあったものを指す。これについては、ハーバート・V・ニコルソン牧師「やぎのおじさん」が付き添い責任者となって届けた話として、沖縄だけでなく広く日本で知られており、また、ニコルソンの自著『やぎのおじさん行状記』にも記されている¹²⁾。したがって、ここでは後の行論に関係する箇所のみ、既出資料の一部を引用するにとどめる。「乳山羊一九四頭が家畜□□けをせんもんに、あつかつている新教聯合機関のヘイファズ救済会からおくられてきた。（中略）民政府公衆衛生、社会事業、農務各部協議のうえ、市町村へ各一頭づつ四三頭、農事試験場へ五二頭、病院へ二六頭、屋我地療養所へ二五頭、南北琉球へ一〇頭（五頭づつ）孤児院へ三三頭、中部農林へ三頭、それぞ

れ配布をおこなつた。なお、一九四頭のうち二頭は斃死した。市町村中渡嘉敷、座間味、仲里、具志川、粟國、渡名喜、伊平屋、伊是名は今回は配布をおこなわなかつた」¹³⁾。この引用文中、下線を施した箇所に、とりあえず留意しておくこととする。

さて、1949年4月から1950年2月までの後期についてである。この期は、全11回・計2,615頭を数え、これはララを通じた山羊到来の主要部分をなす。しかし、この後期の到来について、回数と頭数・種類を述べる以上に踏み込んだ著述は、現在まで次の1点だけのようである。その1点は、吉田茂「戦後初期の沖縄畜産の回復過程と布哇連合沖縄救済会、並びに沖縄復興布哇基督教後援会～豚と山羊～」である¹⁴⁾。吉田論文は、そのタイトルが示すように、ハワイ在住沖縄県出身キリスト教信者が中心となった「沖縄復興布哇基督教後援会」による沖縄への山羊寄贈運動の経緯を取り上げている。*Hawaii Times*, *Hawaii Herald* 両紙を史料に、運動のきっかけと開始、募金活動の展開、1949年5月31日および6月6日の山羊沖縄到着と輸送付き添い人などを明らかにした点で、意義深い。しかし、考察対象は、後期11回のうちの2回、寄贈頭数2,615のうちの約4分の1に止まる。残りの回と頭数を含めた後期の全体把握未だしの感否めない。

そこで、全体把握へ多少なりとも近づく一方法として、『うるま新報』1947年1月～1950年4月発行分から、後期の寄贈山羊に関する新聞記事を拾い出してみた。それを整理してみると、表1ようになる。記事内容は到着、飼育、利用など様々であり、到来の経緯とその後の問題点も含めた山羊の全体像に近づくために役立ついくつかの手掛かりを与えてくれる。しかし、ここでは到着に関する記事に限定し、その年月日・頭数・寄贈団体・付添人に注目して見ることとする。

表1に到着に関するすべてが網羅されているわけではないが、そこから見えてくるもっとも重要なことは次の点ではなかろうか。吉田論文が考察対象とした輸送、すなわち沖縄復興布哇基督教後援会選出の付添人が責任者となった5月および6

表1 ララ經由寄贈山羊関係『うるま新報』記事（1949年4月～1950年3月）

事項	頭数	寄贈団体	付添人	掲載年月日
到着 4月1日 [第1回]	288	—	3人	1949.04.04
到着 4月21日 第2回	286	米国メソジスト教団・ハワイ同胞	ホームー・ハーベエ、ドン・ビエター、ロバート・ケース、ロバート・ワイルソン、山本岩男	1949.05.02
到着 5月12日 第3回	230余	—	—	1949.05.23
到着 5月30日 第4回	354 累計 1,146	ホノルル教会連盟・沖縄復興布哇基督教後援会	山城松、外間盛安、屋比久孟吉、具志保雄、天仁屋弘	1948.12.17 1949.05.30 1949.06.06
到着 6月22日 第5回	288	ホノルル教会連盟・沖縄復興布哇基督教後援会	知念三良、佐喜真彰、城間次郎牧師、安里周規、澤岷徳一	1948.12.17 1949.05.30 1949.07.04
飼育・罹病				1949.07.04
到着 7月10日 第6回	182	ハワイ基督教連盟沖縄後援会	5人	1949.07.18
飼育・斃死率				1949.10.21
送出概況 [11月2日]	累計 2,115			1949.11.03
飼育・増加数				1949.11.03
到着 12月7日	300余	ララ	—	1949.12.09
飼育・方法				1949.12.21
利用（乳）				1949.12.28
到着月日不詳*	300	ララ	—	1949.12.31
利用（乳）				1950.01.22
利用（乳）				1950.01.27
飼育・暴風被害				1950.01.28
到着 2月2日 第11回（最終回）	315 累計 2,750	[在米の教育団体]	アーチ・マギー、アモス・バンテ、モラム・デアーズ、ゴドム・ペリー、アビン・スターマン	1950.02.03 1950.02.09
利用（肉）				1950.02.12
飼育・規程				1950.02.15
飼育・方法				1950.03.10
利用（乳）				1950.03.14
飼育・増加数				1950.03.14
飼育・繁殖				1950.03.14

注1)『うるま新報 復刻版』不二出版、1999年より作成。

2) 表中の「—」は無記載を意味する。

3) 事項欄中の到着に関し、回数に「」を施したものは推定。

4) 事項欄中の*を付した事項は、記事には「到着」とのみあり、月日の記載なし。当時、サンフランシスコ～沖縄の航海日数は2週間ほどであったことからすると、この300頭は、12月7日到着の山羊を指したとも考えられる。

月の2回は、全11回のうちの第4回・第5回に当たるものと沖縄では報じられ、さらに言えば、その位置付けで認識されていたということである¹⁵⁾。これに関連する記述が吉田論文にもある。それは、沖縄復興布哇基督教後援会は「アメリカ陸軍当局へ沖縄へ500頭の山羊を贈るための

輸送許可の申請をしていた。ところが、ロサンゼルスニコルソン牧師から同後援会顧問ボールス博士へ『アメリカ陸軍から沖縄へ2,750頭の山羊輸送の許可を得たので、このうちの500頭を同後援会の山羊の輸送に当てたらどうか』との連絡があり、同後援会としては渡りに船とばかりにこれ

を受け入れることにした。」との記述である¹⁶⁾。

『うるま新報』記事も吉田論文も、後期到来の山羊2,615頭が、1949年4月4日到着分を第1回と数え1950年2月2日の到着をもって最終回とする全11回・総数2,750頭送出という事業計画であり、ある一つのプロジェクトのもとでもたらされたのだと示唆している。

では、示唆しつつも明確にはされていない、そのプロジェクトとは何か。これを知るヒントが前出『やぎのおじさん行状記』に見える。それは、「ハイファー・プロジェクトが日本に山羊を送ることに決定すると、私たちはすぐに志願して、無給でこの計画を助けることになりました」(p. 223)のくだり冒頭の「ハイファー」である。この「ハイファー」はすでに見た沖縄民政府による刊行物中には「ヘイファズ」と記されていた。表記は異なるが、どちらも heifer (s) の日本語表記と考えてよいであろう。しかし、これらはいずれも前期1947年についての記述であって後期についてではない。ただし、『やぎのおじさん行状記』にはさらに「ハイファー・プロジェクトが、日本と沖縄に五千頭の山羊を送り出すことになりました」(p. 237)とある。これは、沖縄への前期送達終了後のことであるから、沖縄について言えば、後期の送出計画について述べたものである。ここに見える「ハイファー・プロジェクト」こそ、後期全11回・総数2,750頭送出事業の計画・実施プロジェクトであったと考えてよいであろう。

3. 「Heifer Project」と沖縄

最後に、本稿2.で述べた推察、すなわち、沖縄における後期の山羊到来全体が一つのプロジェクトのもとでもたらされた、そのプロジェクトはニコルソンの言う「ハイファー・プロジェクト」であったとの推察、その信憑性を補強するものとして、次の資料を紹介しておくこととする。それは、沖縄駐留米海軍軍政担当将校ワトキンスが収集した沖縄戦後初期の米軍政に関する膨大な資料群に含まれていたもので、その刊行にあたり、編集者によって「山羊のミルクを沖縄援助のために

送る運動のパンフレット」と名付けられている¹⁷⁾。このパンフレットはマイクロフィルム6コマ（そのプリント集成である刊行物の6ページ）分で、一連のものであるが一綴りではなく、リーフレット3点、① *LATEST GOAT NEWS* (1コマ、山羊の写真入り)・② *We are in the Orient Now* (3コマ、表紙に①と同一の山羊写真入り)・③無題 (1コマ、クリスマスプレゼントとして沖縄へ山羊を贈ろうと呼びかける手紙形式文) からなっているようである。これら3点すべてが沖縄への山羊寄贈を呼びかけるものであることは間違いない。

それでは、これらは後期のそれであろうか。それぞれの発行時期・作成主体に関する記載に留意しつつ、もう少し見てみよう。まず、発行時期である。3点いずれにも明示されていないが、推測の手掛かりになる記載はある。①の手掛かりは「2115 GOATS have gone to Okinawa since March 15, 1949」の見出しと、「TO COMPLETE THE QUOTA GIVEN US 635 MORE SHOULD BE SENT」である。つまり、1949年3月以降2,115頭が送出済み、2,750頭送出達成までもう635頭という時点での発行ということになる。②には「2750 Going to OKINAWA in 1949 2115 Now Gone」とあり、言葉は異なるが、①と同じ進捗状況を知らせている。したがって、①②は1949年中はほぼ同時期の発行と推定できる。③には「We have been able to send 2452 goats」とある。送出済み累計が2,452頭に増えているので、①②より少し後の発行である。また、前出の表1に、「送出概況 [11月2日] 累計 2,115」とあるように、スミス沖縄駐在ララ代表がララ配給委員会で、3月以来米国より沖縄に送られた山羊は2,115頭と報告したのが1949年11月2日のことであった。これを考え合わせると、①～③が後期に係るものであることは確かと言ってよい。

次に作成主体すなわち寄贈者である。これについて明確に記載しているのは②である。最後のページに「Heifer Project Committee」(ハイファー・プロジェクト委員会)という委員会名が明示されている。この委員会は「The Brethren

Service Commission, Evangelical and Reformed Church, American Baptist Home Mission Society, Mennonite Central Committee, Rural Life Association, Fellowship of Reconciliation, National Catholic Rural Life Conference, and Methodist Committee for Overseas Relief」の8団体およびその他の協力諸宗派の代表で構成されていたという。この委員会が②の作成主体であるだけでなく、①③も一連のものであるから、それらも含めたリーフレット3点の作成主体であり、そしてHeifer Projectを運営する組織であった。上記8団体のうち、Brethren Service Commission（ブレスレン奉仕委員会）とMennonite Central Committee（メノナイト中央委員会）はララの参加団体であった。しかし、他は参加団体名簿には見当たらず、Heifer Project自体も見出せない。委員会がそうであるように、Heifer Projectもまた、様々な宗派や団体あるいは「やぎのおじさん」ニコルソンのような個人も参加する宗派を超えた広範な参加者に支えられた救援プロジェクト（an inter-faith relief project）であったのではないかと、現時点では考えている。また、委員会構成の記載に続き、連絡（寄付送付）先として、National Heifer Project Committee（メリーランド州）、Evangelical and Reformed Church Commission on World Service（ミズーリ州）、そしてHeifers for Relief（オレゴン州、カリフォルニア州北カリフォルニア、同南カリフォルニア・アリゾナ3か所の事務所）所在地が掲げられている。沖縄への山羊到来の前期1947年について、沖縄民政府が山羊は「ハイファズ救済会からおくられてきた」と記したことはすでに述べたが、上記に連絡先として挙げられたHeifers for Reliefが「ハイファズ救済会」であることは十分考えられる。そうであるなら、Heifers for Reliefは沖縄への山羊到来前期・後期を通じて関わったことになる。

終わりにかえて

以上、1949年4月から翌年2月までという限られた期間、沖縄に対する救援としてララを通じ

て贈られた山羊を取り上げて検討をしてきた。しかしながら、今回できたことは、寄贈団体として記されてきた「ハイファース・プロジェクト」あるいは「ハイファズ救済会」という言葉だけであったものに、少しばかり存在感を加え得たということであろうか。

ただ、考察を寄贈山羊にしぼったことで、Heifer Project（ハイファース・プロジェクト）自体の存在を確認し、その特性を垣間見ることができた。そしてそのことから、必ずしもララの参加団体として名を連ねていない様々な救援活動があり、それら相互あるいはそれらとララとの連携はどのように図られたのか、という新たな課題が生まれた。この課題を触発したリーフレットの一部分を【注】の後に【参考資料】の形で示しておき、当面は到来山羊のその後、すなわち各飼育者への配付と飼育・利用の具体的過程を追うこととする。

【注】

- 1) 加藤恭亮編『ララ記念誌』厚生省刊、1952年。
- 2) 沖縄民政府知事官房情報課編・刊『情報』第1巻第3号、1948年3月20日、p. 1。
- 3) 沖縄大百科事典刊行事務局『沖縄大百科事典』下、沖縄タイムス社、1983年、p. 833。リバック（RIVAC: Ryukyu Islands Voluntary Agency Committee）による救援は、沖縄の本土復帰を機に、1971年6月をもって終結した。同書、p. 845。なお、沖縄以外の日本諸地域でのララの活動は1946年6月（ララ物資の初着荷11月30日）から1952年6月までであった。
- 4) 琉球政府社会局編・刊『厚生白書 1960年度版（創刊）』1961年、p. 17。
- 5) 琉球政府社会局編・刊『厚生白書 1960年版（創刊）』1961年、p. 17。
- 6) 『うるま新報』1947年10月10日付「ララの贈物 戦災孤児貧民に延びる温い手」、同11月7日付。同紙1948年5月21日付、同6月18日付、同7月30日付、同9月24日付、同10月29日付。同紙1949年1月24日付、同4月4日付、同10月25日付、同11月3日付。
- 7) 沖縄民政府知事官房情報課編・刊『情報』第1巻第3号、1948年3月20日、pp. 1-2。ただし、引用文中の「衣類の一〇トン」は、文意からすると「衣類の一〇〇トン」の誤りであろう。
- 8) 沖縄民政府知事官房情報課編・刊『情報』第1巻第3号、1948年3月20日、pp. 1-2。
- 9) 記事を逐一示さないが、『うるま新報』1947年12月5日付、12月26日付などを参照。ちなみに、数字算出の期間が異なるため数字の単純な比較はできないが、日本への場合、

- 全期間の「ララ物資のうちの約20%と云う夥しい量が、在留邦人の手によつて集められた」とされている。前掲『ララ記念誌』p. 26。
- 10) 下嶋哲郎『豚と沖縄独立』未来社, 1997年。吉田茂「戦後初期の沖縄畜産の回復過程と布哇連合沖縄救済会, 並びに沖縄復興布哇基督教後援会～豚と山羊～」『科研成果報告書 戦後沖縄とアメリカ異文化接触の総合的研究』研究代表者・山里勝己, 2005年, pp. 249-270。また, 最近では, 沖縄県公文書館がHPの「公文書館通信」の「あの日の沖縄」中に「1948年1月15日 布哇(ハワイ)連合沖縄救済会, 郷里へ豚を送る運動を始める」を掲出。同館所蔵史料の紹介をかねて, 簡潔な概要を掲載している。
 - 11) 渡嘉敷綏宝『沖縄の山羊』那覇出版社, 1984年, pp. 20-21, 158。
 - 12) ハーバート・V・ニコルソン著, 湖浜馨訳『やぎのおじさん行状記』CLC 暮しの光社, 1974年。
 - 13) 沖縄民政府知事官房情報課『情報』第1巻第3号, 1948年3月20日, p. 12。
 - 14) 前掲『科研成果報告書 戦後沖縄とアメリカ異文化接触の総合的研究』研究代表者・山里勝己, 2005年, pp. 249-270。とくに, p. 263以降。
 - 15) 1949年2月3日付『うるま新報』は, 「乳山羊全部到着」の見出しで, 「米国からの乳山羊は第一便以後ぞくぞくと到着配布されたがきのう最終回第十一便の三一五匹がホワイトビーチに到着これで累計二七五〇匹となつた」と記している。
 - 16) 前掲, 吉田茂「戦後初期の沖縄畜産の回復過程と布哇連合沖縄救済会, 並びに沖縄復興布哇基督教後援会～豚と山羊～」『科研成果報告書 戦後沖縄とアメリカ異文化接触の総合的研究』研究代表者・山里勝己, 2005年, p. 265。
 - 17) ワトキンス文書刊行委員会編『沖縄戦後初期占領資料42』緑林堂書店, 1994年, pp. 228-232。

【参考資料】

「山羊のミルクを沖縄援助のために送る運動のパンフレット」から、*We are in the Orient Now* のうち沖縄に対する山羊寄贈プロジェクトの経過・趣旨や関係者からのメッセージの部分（出典：ワトキンス文書刊行委員会編『沖縄戦後初期占領資料42』緑林堂書店，1994年，pp. 230-231）を参考資料として掲げる。なお、英文の後の日本語訳は筆者による。

As tangible proof of the lasting value of all gifts to GOATS FOR RELIEF, we list WHAT HAS BEEN DONE and the PRESENT PROJECT for OKINAWA in 1949.

「救援やぎ」への寄贈すべてが持続的で真の価値があるというわかりやすい証拠として、「これまでなされたこと」と「沖縄へのプレゼント計画・1949」を入れておきます。

WHAT HAS BEEN DONE—

In October, 1947, 200 goats were sent to Okinawa, and distributed to Villages, hospitals, orphanages, agricultural experimental stations and to three leper colonies. In November, 1947, 200 goats were sent to Japan proper, and distributed through the Welfare and Animal Husbandry Bureaus of Japan. In 1948, 2,000 goats were sent to Japan.

これまでなされたこと—

1947年10月，200頭のやぎが沖縄に送られ，村々，病院，孤児院，農事試験場やハンセン病療養所3か所へ配られました。1947年11月，200頭のやぎが日本本土に送られ，日本の厚生・農林両省を通じて配られました。1948年には，2,000頭のやぎが日本へ送られました。

PRESENT PROJECT FOR 1949—

Apparently pleased with the results of the 200 goats sent to Okinawa in 1947 the Army again has agreed to underwrite all shipping costs for sending of 2,750 goats (2,500 does and

250 registered bucks) to this island in 1949. This is certainly a CHALLENGE to us.

沖縄へのプレゼント計画・1949—

1947年に沖縄へ送られたやぎ200頭の結果に気をよくして，軍は，この島へ1949年中に2,750頭（メス2,500頭および見ただけでそれと判るオス250頭）のやぎを輸送する費用全部を引き受けると，再び正式に同意しています。私たちにとって，このプロジェクトは，まさしく「チャレンジ」です。

THE NEED—

Nearly all the livestock was killed during the war. Over 100,000 goats were destroyed—only some 2,000 remain of that total. We are the first to ship any animals to these people.

必要性—

戦争中，家畜がもう少しですべて殺されてしまうところでした。やぎは100,000頭以上が命を奪われてしまい，全部合わせても2,000頭ほどが残っているばかりです。沖縄の人々に何かしらの生き物を最初に届けたのは，私たちです。

Rev. H. V. Nicholson - Supervisor of the First Okinawa shipment says:

"I CAN HARDLY EXPRESS THE GRATITUDE OF THE OKINAWANS FOR THESE GOATS. THE COMING OF THE GOATS HAS BROUGHT MORE HOPE THAN ANY OTHER GIFT. THE LEADER OF A LEPER COLONY SAID WITH TEARS IN HIS EYES: I AM HAPPY THAT GOD HAS ALLOWED ME TO LIVE TO EXPERIENCE THIS MANIFESTATION OF CHRISTIAN LOVE."

ハーバート・V・ニコルソン師—沖縄への第1回輸送責任者は次のように話します。

「届いたやぎに沖縄の人々がどんなに感謝したか，私は，十分に言い表すことができませんが，他のどのような贈り物より，やぎの到来は希望をもたらししています。あるハンセン病療養所のリー

ダーは、目に涙を溜めてこう言いました。幸せにも、隣人愛の発露を身をもって知るよう、神は私を生かしておかれたのだと。」

Why OKINAWA? Why—

May 4, 1949

To Whom It May Concern:

Having been with the 96th Infantry Division, Military Government Unit, on Okinawa Island during the heavy fighting in 1945, I can personally testify as to the total destruction inflicted on this meagre spot of earth. The tremendous armies, navy and air forces which battled there crashed almost every living thing and almost every work of man, a whole civilization. To us who were there among civilians and military, it was an unspeakable panorama of suffering and death.

Goats were running everywhere when we landed, almost the only meat or milk animal possessed by the people: I recall the hopeless expressions of the people as they saw the steady process of goat slaughter by reason of shells, bombs, fire, trip flares at night, starvation and thirst. There is no more worthy gesture from America to Asiatic peoples than this small effort toward replacing Okinawa's 100,000 goats.

(Signed: Chauncey M. Depuy
Commander U. S. N. R.)

なぜ沖縄？—

1949年5月4日

関心をお持ちの各位へ

1945年の激戦の間中、第96歩兵師団とともに沖縄の軍政部にいたので、私個人として、地球のこのちっぽけな場所に加えられた全破壊行為について証言することができる。そこで戦ったおびた

だしい数の陸軍、海軍そして航空部隊は、あらゆる生き物と人の業のほぼすべて、文化を丸ごと打ち碎いた。文民であれ軍人であれ、そこにいた我々にとって、それは言語に絶する苦痛と殺戮の光景であった。

我々が上陸したとき、山羊はそこかしこを駆け回っていた。島の人々が所有していたほとんど唯一の、肉あるいはミルクをもたらす家畜。山羊は、私に人々の絶望の表情を思い起こさせる。砲弾、炸裂弾、銃火、夜間照明弾、餓えと渇き、これらの理由で止むことのなかった山羊殺しのプロセス、それを見ていた人々の絶望の表情を。むごたらしく死んだ沖縄の100,000頭の山羊たちの代わりを送る、この小さな取り組みほどアメリカからのアジア人向け意思表示にふさわしいものはない。

チョーンシー M. デピューの署名
沖縄駐留アメリカ合衆国軍海軍中佐

HOW YOU CAN HELP—

Rev. Robert Smith, of Lara in Okinawa writes:

"The goats receive every consideration. The people are making the most of each opportunity. Milk is given to the village dispensaries for free distribution to the sick, the invalids, and undernourished babies."

どんなふうに役立つか—

ロバート・スミス師、沖縄駐在ララ代表は、次のように手紙で知らせています。

「やぎはあらゆる配慮を受けています。人々はそれぞれ、得た好機を最大限に活かそうとしています。ミルクは、病人、傷病者、そして栄養不良の乳児たちへ無料で配給するため、村の診療所に贈与されています。」

(2018年2月19日 受稿)
(2018年3月1日 受理)